

古今集と新古今集の間に見られる歌ことばの変化: 雨と時雨

山元 啓史^{1,a)} グリフィン・シュヴィソー^{2,b)}

概要: 本論では、歌ことばの接続関係の変化について述べる。古今集（905年頃）から新古今集（1205年）までの歌ことばの変化を用語の接続関係から記述できるかどうかを検討する。同じ用語でも接続関係が大きく変わったもの、変化が少なく安定しているものに分類し、300年間に見られる変化の特徴について考察し、接続関係辞書の記述と歴史変遷可視化システムの開発について述べる。

Changes in classical Japanese poetic vocabulary between the Kokinshū and the Shinkokinshū: *ame* (rain) and *shiguru* (drizzling rain)

HILOFUMI YAMAMOTO^{1,a)} GRIFFEN SCHWIESOW^{2,b)}

Abstract: This paper addresses the changes of classical Japanese poetic vocabulary between the Kokinshū (ca. 905) and the Shinkokinshū (1205), a period of three hundred years. We will examine whether it is possible to describe the changes in the mutual relationships of words in poetry between the Kokinshū and the Shinkokinshū based on their cooccurrence patterns.

1. はじめに

本論では古今集（905年頃）から新古今集（1205年）に見られる歌ことばの変化について述べる。「雨」の種類、特に「時雨」との違いについて歴史の変遷を明らかにする。八代集の300年間に於いて、「雨」に関する用語は名詞・動詞合わせて、およそ17種類見られるが、中でも多く用いられている用語は、「時雨」「雨」「五月雨」「春雨」の4種類である（表1）。万葉集（759年頃）の中で、雨に関連する用語で「雨」に続いて多く出現する用語は「時雨」である[2]。八代集（905年頃-1205年）においては、「雨」よりも「時雨」のほうが多く出現する。

「雨」というと現代人は6月、すなわち梅雨の風物を考えることが一般的である。しかしながら、「梅雨」や「五月雨」と「時雨（しぐれ）」がどう違うかという現代人の感

覚はおぼろげになる。時雨とは、晩秋から初冬頃に一時的に降る通り雨であり、梅雨や五月雨とは違い、降ったり止んだりを繰り返すことが多い[1]。

表1 八代集における雨、4種の出現頻度

No	出現数	用語	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
1.	164	時雨	16	17	15	16	6	9	34	51
2.	153	雨	23	33	25	15	8	4	8	37
3.	68	五月雨	3	5	5	10	11	4	16	14
4.	35	春雨	8	7	0	2	3	1	3	11

2. 方法

データベースには八代集データベースと和歌用語の可視化システムを使用する[4]。テキストは、国文学研究資料館作成による二十一代集データベースである[3]。底本は国文学研究資料館蔵「正保版本二十一代集」である。八代集収録の和歌の内、長歌をのぞく9484首を用いた。長歌はテキストの長さが著しく異なるものがあるため除外した。歌中に出現する任意2語の組み合わせからグラフを作った。任意2語によって構成されるグラフパターンの重要度は計算式(1)によった。

¹ 東京工業大学
東京都目黒区大岡山 2-12-1 W1-8

² ワシントン大学
4014 University Way NE, Seattle, WA 98105-6203

a) yamagen@ila.titech.ac.jp

b) griffens@uw.edu

$$cw(t_1, t_2, d) = (1 + \log \text{ctf}(t_1, t_2, d)) \sqrt{\text{idf}(t_1) \text{idf}(t_2)} \quad (1)$$

$$\text{idf}(t) = \log \frac{N}{df(t)} \quad (2)$$

ただし、 t はトークン、 d は表現域、 df は t が現れる表現域の数を返す関数である。異なる時代において、パターンを比較するには、同じ cw 値にて比較する。

3. 結果

「雨」と「時雨る」の合成モデルを作成し、2つの代表的な時代、三代集(905年頃-1007年)と新古今集(1205年)間の違いを分析した(図1)。パターン重要度 $cw < 1\sigma$ において2語は古今集頃は互いに共有するが、新古今頃となると2語が同時に見られなかった。

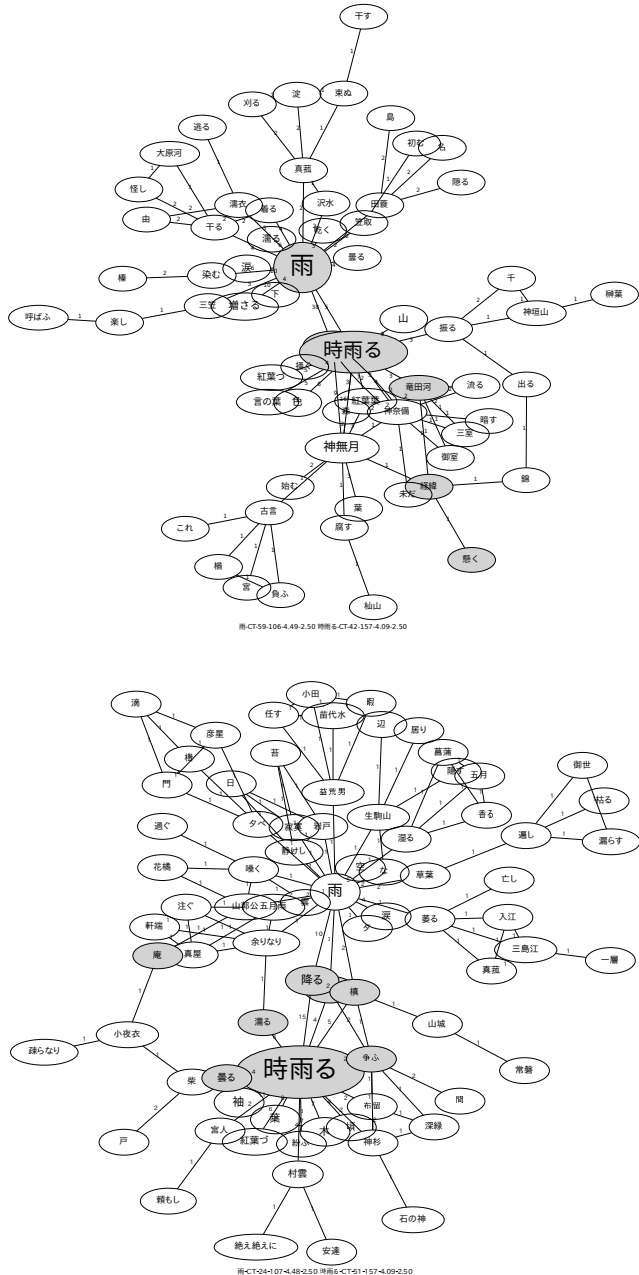


図1 「雨」と「時雨る」の三代集の100年間(上)と200年後の新古今集の比較(下)

4. 考察

三代集の時代には、「雨」「時雨」はともにほぼ同じ歌で出現する関係であった。「雨」は八代集の初期では「時雨る」に相当するの使い方が含まれている可能性がある。新古今集の時代では「時雨る」は一般的な「雨」と区別する特徴を持ちはじめていた可能性がある。新古今集の中では両語同時に用いた歌は2例(能因、人麿)だけであった。ただし、人麿(660年頃-724年)は万葉歌人である。

龍田川／錦をりかく／神無月／しくれの雨を／たてぬきにして(古今314)

神無月／時雨ふるらし／さほ山の／まさきのかつら／色まさりゆく(読人不知新古今574)

新古今集時代の「時雨る」は「雨」伴って用いることなく「時雨る」そのものだけを伝えることができる。つまり、人は「時雨る」という語だけで十分その意味が理解できる。ここでは、これを「語の独立」と呼ぶことにする。三代集時代の「時雨る」は「雨」という語を用いて説明しないと、単なる「雨」ではなくて「雨」という概念に特殊な意味が加わったものであることが伝わらない。これを「他の語による依存」と呼ぶことにする。ある語が他の語による依存している時期では、依存語も被依存語も同じテキストに出現する。逆に「語の独立」の時期には、上位・下位に所属するような二語の関係は同じ表現域にも出現する必要はない。「雨といえば時雨のことだ」というように代表的になると下位の語は上位の語によって表現されることが多い。「花といえば桜」が代表的な例である。しかしながら、「雨」だけで「時雨る」を表現することは確認できなかった。次の時代の「時雨る」の例を見て、分析する問題であろう。

5. おわりに

古今集と新古今集における雨について、「雨」と「時雨」について、八代集データベースを用いて分析を行った。古今集の時代には「時雨る」は「雨」によって説明される非独立の時代であったが、新古今集の時代には「時雨る」は独立して使われるようになった。

参考文献

- [1] 片桐洋一：歌枕歌ことば辞典，角川書店，東京(1983)。
- [2] 正宗敦夫：万葉集総索引 単語篇，平凡社(1974)。
- [3] 中村康夫，立川美彦，杉田まゆ子：国文学研究資料館データベース 古典コレクション『二十一代集』(正保版本) CD-ROM，岩波書店，東京(1999)。
- [4] 山元啓史：八代集用語のモデリングシステム，じんもんこん 2010，人文科学とコンピュータシンポジウム，Vol. 2010，No. 15，pp. 247-254(2010)。